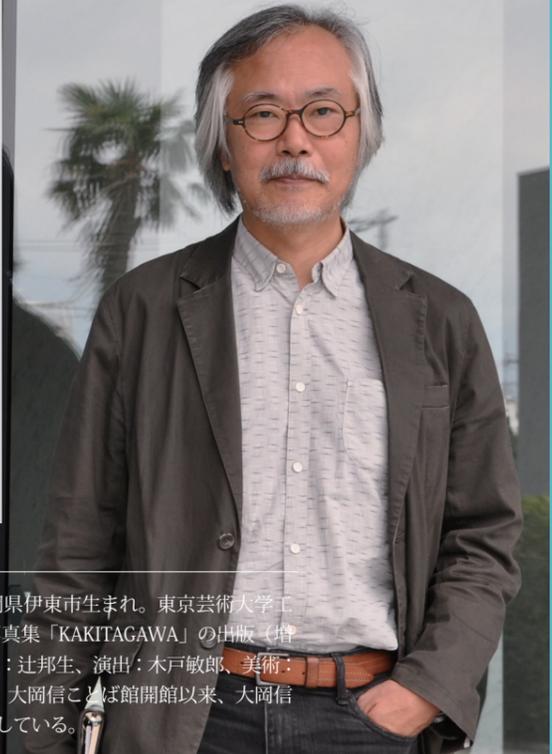




三島企業の考える 三島カルチャー

2



Z会 大岡信ことば館 館長 岩本圭司氏

大岡信ことば館

プロフィール

大岡信ことば館館長・造形家。1956（昭和31）年、静岡県伊東市生まれ。東京芸術大学工芸科卒業、同大学院鍍金専攻修了。立体作品の制作、写真集「KAKITAGAWA」の出版（増進会出版社）、モノオペラ「銀杏散りやまず」（原作・演出：辻邦生、演出：木戸敏郎、美術：磯崎新）にてビデオ映像担当など、幅広く活動している。大岡信ことば館開館以来、大岡信の詩をもとにことばを造形化するという新たな試みを展開している。

「ことば」を大切にすること を伝える場所として

ハイレベルな通信教育で、全国に広くその名が知られているZ会。2009年、三島駅北口前に建てられたZ会文教町ビル内に同社の直営文化施設としてオープンした「大岡信ことば館」は、三島市出身の世界的な詩人・大岡信のコレクションを核とした企業ミュージアムだ。

「ことば」の立体的な展示など、造形家としてユニークな活動を中心となつて行う岩本館長に話を伺った。

業務内容を教えてください。

Z会は、もともと大学受験向けの通信教育の会社です。特に、次の時代のリーダーとなり得る人材を育成したいという会社としての理念があります。

現在は三島を本拠地していますが、6〜7年前までは長泉町、その前は中伊豆に本拠地がありました。

今は大学受験だけでなく、幼児から社会人までを対象として、さまざまな形で教育に関連することのお手伝いをしています。

枠に捕らわれない自由な活動を目指す

大岡信ことば館は、大岡さんのことを顕彰しながら、文化を発信できる施設と

してスタートしました。現在取締役相談役の藤井史昭前社長は美術や文学に造詣が深く、文化に貢献したいという強い思いから、佐野美術館をはじめとした様々な文化団体を支援するともに、社の60周年記念事業で『若山牧水全集』を発行、70周年記念では『子規選集』を発行しています。大岡さんにはその監修や編纂に携わっていただくなどの関係があった中で、Z会が三島に新しくビルを建てるにあたり、大岡さんとの関わりをより深くしたいという考えからことば館の構想が生まれました。

美術評論もたくさん書かれた大岡さんのもとに美術家から集まった作品が、400点以上あります。それを展示する施設というのが構想の発端だったので、大岡さんは日本の詩人の中でも「ことば」「日本語」を大切にしてきた方なので、館としてもそれを大切にしていきますという意味で「ことば館」という名付けをしました。枠に捕らわれない、文学館でもなく、美術館でもない、新しいコンセプトで自由な活動することを目標にしています。

造形家である岩本館長とZ会の接点はどのようなものだったのでしょうか。

若い頃、『増進会旬報』というZ会の会報の表紙デザインを担当したことをきっかけに、新しい建物を建てる時などにアドバイザーとして関わっていました。Z会の窓のロゴマークも、昔私がデザインしたんですよ。

いろいろな仕事をいただいている中で、大岡さんのミュージアムを作るための準備委員会に参加し、最初は副館長のような形で、館長は歴代の社長がやるという話だったので、社長は社長業が忙しいということ、私が館長になりました。

大岡信の思想を 具現化する場所として

大岡さんが「ことば」は知識ではなく、体験である（『日本語の豊かな使い手になるために』より）と書いています。

話し言葉、書き言葉だけが「ことば」ではなく、美術、音楽、身体表現にして、人が他の人に何かを伝えるということ、は「ことば」であるということです。

その考えを具体化する試みとして、大岡さんの詩や、大岡さんが広く扱ってきた万葉集などの言葉を空間に移すというか、造形として、まさしく「ことば」というものを体感する空間をテーマに、開館当初は展示をしてきました。

館として、また造形家として、三島とどのように関わっていきたいですか？
ことば館は新参者ですが、三島には他にもミュージアムがあるので、横の連携があるといいと思います。数年に一度でも文化的な施設が共同でひとつ企画を立てて、何かをやるいいと思います。



「ことば」の造形展示

三島の魅力「水」を 文化的に考えたい

私のような外から来た人間から見ると、三島の街の一番の魅力は「水」です。

街中に水路が張り巡らされ、その水が澄んで透明である街はなかなかありません。源兵衛川も桜川もすごくいいところなので、そのあたりを核にして何かできるのではないかとずっと思っています。

大岡さんも三島の水や柿田川を身近に生きてきた人で、私も水が好きなので、せ

かくの資源である水に、文化的な面白さを付加した形で、市民も楽しんで、外から来た人にも魅力を感じてもらえるような取り組みができればと思います。作品を作ることに限りませんが、市民や行政の文化に関わる意識としても、三島の持っているものに立ち返るのがいいのではないかと思います。

大岡信ことば館を通じてZ会が伝えたい思いは、どんなことでしょうか。

企業に限らず、私たちが生きていく上で何をすべきなのかという原点に立ち返ると、大人が最終的に為すべきことは、次の世代、子供たちに何を伝えることができるかということに尽きる気がします。

当館は大岡さんをテーマにすることが常に根底にありますが、その中で広い意味で「ことば」を大切にすることを子供たちに伝えていきたいと考えています。

今、大岡信ことば館はZ会グループの持株会社である増進会出版社のCSR推進室（社会貢献に関わる事業を行う部署）に位置づけられています。

昨年、今年と大社の杜みしまや楽寿園でことばの造形展示をしましたが、外から声がかかることは社内的な評価にもつながります。12月6日まで世田谷文学館で開催中の「詩人・大岡信展」でも、最後のコーナーで造形展示をしていて、これからも積極的にやっていきたいと考えています。



大岡信ことば館

静岡県三島市文教町1丁目-9-11
Z会文教町ビル1,2F
http://kotobakan.jp/

三島企業の考える三島カルチャーは、「三島の文化応援プロジェクト」が、三島周辺に拠点を置く企業の方々に、三島の文化についてインタビューするシリーズ企画です。

次回IFMみしま・かなみ（ボイス・キュー）小坂真智子さん